

最高裁判事と巨大法律事務所と国、「原子力村」が結びつき、司法の「公平なしさ」を損なっているのではないか。原発事故被災者の取材なども、この結びつきを明らかにしてきたジャーナリストの後藤秀典さんと聞きました。

(日木利博)

## 「原子力村」の結びつき

ジャーナリスト 後藤秀典

①

—調べるきっかけになつたのは、後藤 原発避難者訴訟の原告が裁判で東京電力から攻撃されていることを雜誌に一昨年、連載しました。それを読んだ、高裁判事を長年務め司法行政を取り仕切る最高裁判所事務総局に勤務した経験のある弁護士から、最高裁と巨大法律事務所と東京電力が繋がつてゐるところを聞いたことからです。最初はほんとしました。少なくとも司法の独立性はそれなりに担保されているのではないかと書いていたからです。ところが調べると、50人以上の弁護士を抱え

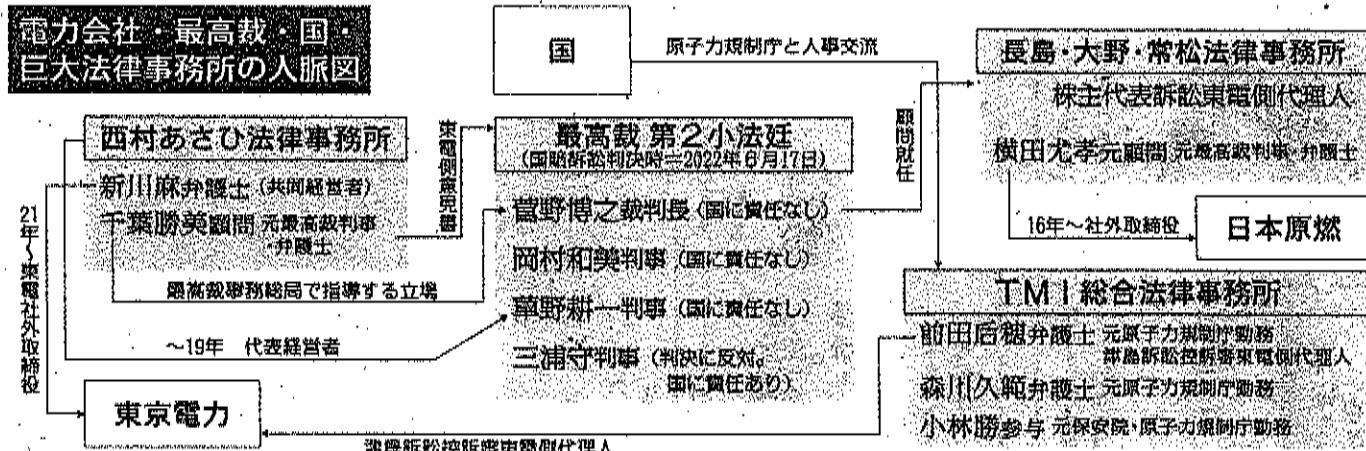
—調べるきっかけになつたのは、裁判に判事を送り出し、遅延した判事が巨大法律事務所に天下りする」とがから攻撃されていることを雜誌に一昨年、連載しました。それを読んだ、高裁判事を長年務め司法行政を取り仕切る最高裁判所事務総局に勤務した

—調べるきっかけになつたのは、裁判に判事を送り出し、遅延した判事が巨大法律事務所に天下りすることが当たり前のものに行われていた。こんなことで公平・公正な裁判が担保されるのか、驚きと帰さを感じました。

【肩すかし判決】  
—2022年6月17日、東電福島第一原発の事故を巡って4件の

ごとうひでのり ジャーナリスト 1964年生まれ。テレビの報道でディレクター・プロデューサーを務める。NHK「消えた黒元10年の軌跡」、「分断の果てに『原発事故避難者』は問い合わせる」(貧困ジャーナリズム賞)など。著書『東京電力の変節—最高裁・司法エリートとの密着と原発被災者攻撃』(貧困ジャーナリズム大賞)。

# 東電代理人事務所に天下り



後藤 6・17最高裁判決の内容を端的にいうなら、福島第一原発事故について「想定を超える大きな津波が来たので、たゞ事故前の予測に基づいて國が東電に命令し、東電が防潮堤などを造る対策を取ったとしても、過酷事故の発生を防げなかつた。だから國に責任はない」というものであります。萬歳まで原告と被告が議論をたたかわせ積み上げてきた争点—大津波の予見可能性を示した國の地図予測「長期評価」の信ぴょう性—などの判断を避けた「肩すかし判決」といわれています。その後、この判決がまつちだと論評したものをほとんどみかけません。

2ヶ月たたずに判決を担当した最高裁判事の4人の判事は、裁判長はじめ3人の判事が判決を支持し、検事出場の三浦守判事だけが異議を有する。弁護士になって最初に所屬したのが長島・大野・常松法律事務所の前身。常松法律事務所の代表経営者を15年

のうち、裁判長はじめ3人の判事が判決を支持し、検事出場の三浦守判事だけが異議を有する。弁護士になって最初に所屬したのが長島・大野・常松法律事務所の前身。常松法律事務所の代表経営者を15年

のうち、裁判長はじめ3人の判事が判決を担当した最高裁判事の4人の判事は、裁判長はじめ3人の判事が判決を支持し、検事出場の三浦守判事だけが異議を有する。弁護士になって最初に所屬したのが長島・大野・常松法律事務所の前身。常松法律事務所の代表経営者を15年

のうち、裁判長はじめ3人の判事が判決を担当した最高裁判事の4人の判事は、裁判長はじめ3人の判事が判決を支持し、検事出場の三浦守判事だけが異議を有する。弁護士になって最初に所屬したのが長島・大野・常松法律事務所の前身。常松法律事務所の代表経営者を15年